

## 令和6年第12回教育委員会会議

令和6年11月6日

午前 9時30分 開会

### 1 開会宣言

○廣瀬教育長 それでは、ただいまから令和6年第12回教育委員会会議を開会いたします。

会期は、本日限りといたします。

本日の会議の欠席者を、教育総務課長から報告をいたします。

○森教育総務課長 本日、欠席者はおられません。

○廣瀬教育長 傍聴者はお見えですか。

○伊藤教育総務課主幹 傍聴者はおりません。

### 2 会議録署名者の決定

○廣瀬教育長 それでは、会議録署名者の決定に移ります。

お諮りいたします。

本委員会の会議録署名者として、堀委員と数馬委員とでお願いしたいと思いますが、御異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○廣瀬教育長 御異議ないようですから、提案どおり決定をいたします。

### 3 議事

○廣瀬教育長 これより議事に入ります。

本日の議事は報告事項3件ですが、報告事項「四日市市総合計画中間見直しについて」は今後、市議会で報告される事項であるため、非公開で報告する必要があると考えます。

委員の皆さん、御異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○廣瀬教育長 御異議がないようですから、後ほど非公開にて報告をいたします。

#### (1) 報告

## 令和6年度全国学力・学習状況調査結果の分析について

○廣瀬教育長 それでは、報告事項の説明に入ります。

報告事項、令和6年度全国学力・学習状況調査結果の分析について説明をお願いします。  
指導課長、お願いします。

○草川指導課長 指導課長草川です。よろしくをお願いします。

52分の3から全国学力学習状況調査の結果分析について御報告します。

52分の6を御覧ください。

黄色い部分が小学校の国語・算数、中学校の国語・数学でございます。小学校算数は本市62、県が62、全国の63.4を下回ります。小学校国語は本市67、三重県も67、そして全国67.7、やや下回ります。中学校も下のほうが多いですけれども、本市が57、そして全国は58.1でやや下回ります。中学校数学は本市54、全国は52.5ということで上回っているということでございます。

52分の7ページをお願いします。

上段は、全国の平均生徒数を100としたときの本市の比較を経年で表したものです。中学校は5年度と比べると下がっているんですが、問題が難しかったということが全国的にもあります。無解答率は青色が本市、緑色が全国です。つまり、無解答が全国より少ない傾向は変わっていません。

強み弱みを小中そして教科別に示しました。小学校算数の道のりが等しい場合の速さ、時間を基に判断してその理由を記述することが課題と書いています。お手元にA3の資料を置かせていただいております。これが道のりの問題です。あなたさんとほのかさんがそれぞれ学校に行く。そこであなたさんは20分かかり、ほのかさんは24分かかった。あなたさんとほのかさんのどちらが早いですか。すぐ分かるような気がするんですが、案外これができていないという結果でした。距離は300と900で同じです。ということで、比べると分かるんですけども、この番号を選んだわけを言葉や数を使って説明を書きましょうというところがあまりできてなかったという結果です。間違えの例は右側に書いてあります。ただ単に300と900、1200、1200メートル同士ということを書いてあるだけで、その関係、単位量当たりの大きさの本当の意味を理解できてない、説明しきれていないということが多かったように思います。300と900のその下に、例えばこの子たちの時間などが書いていれば説明できたかもしれませんが、そういうのを読み解くことは非常に苦手だということがありました。

昨年度の問題の中の果汁30%と30%を合わせたら何%になるか。これと同じような問題だと思うんですが、そういったところをまだまだ苦手としているということが浮き彫りになってまいりました。

続いて中学校の国語は52分の7ページになりますけども、文章と図を結びつけて、その関係を踏まえて内容を解釈するということが苦手だということもあります。

続いて、52分の8から9ページにかけては正答数の分布グラフです。山の形としてはよく似ている傾向があると言えます。数学に関しては、台形型ということで、これも全国的にあるいは本市も同じような傾向があります。どちらかというと二極化的な傾向があるのかなと思います。

続いて、52分の10ページです。

これは校種・教科別調査結果の概要をまとめたものです。資料の下のほうにいきますと、白の逆三角、これは2ポイント以上低い。黒の逆三角は5ポイント以上低いということです。例えば国語でしたら、競技場の競技ですね。これが書けなかったということです。一方で、以前は非常に苦手でした主述の関係、主語と述語の関係は捉えられているということです。

続いて、52分の11ページは小学校算数です。

ここにも先ほど申しました黒の逆三角のところが5ポイント以上下回っていたという結果です。軒並みポイントが下回っているというのがありますので、まだまだ課題かなと思っております。

続いて、中学校12ページの国語です。

ここにもありますが、図と文章を結びつける問題ができていないところがあります。

13ページは数学です。

こうして見ますと、丸がついているところが多いということです。

続いて、14ページから児童生徒質問紙の結果についてまとめました。

国語については、好きですかという肯定的回答、肯定的回答というのは1と2を合わせたものです。肯定的回答が令和6年度はこれも最高に上がっているということです。

52分の16、算数も同様です。算数・数学の勉強は大切。算数・数学の授業はよく分かるという肯定的回答は高い。算数は好きですかという肯定的回答は高いものの、まだもう一つかなという感じがします。

16ページにってください。

最後に書いてありますように、単元の面白さを明確にして、授業づくりをする必要があるということを考えております。例えば比例関数でしたら決まりを見つけて、そして先を予測するような、そんな面白さ。あるいは図から式、式から図と、いろんな角度から考えて答えを書く、そういった算数の流れの楽しさ、面白さをしっかりと教師が理解して、指導に当たることで、もっと算数好きの子どもたちが育てられるのではないかと考えます。

続いて、17ページは理科です。

理科の勉強は好きですか、御覧のとおりでございます。

先日の中日新聞で、女子の理数離れが記事になっていました。その記事というのは2022年までの学力調査での結果です。なぜこの時期にそれが出たかは分かりませんが、本市の傾向も見てみましたが、やはり同様に、理科が好き、算数が好きという質問から判断すると、女子は低い傾向があったというのが分かりました。この辺については改善が難しい。これも同じように単元の面白さをしっかりと考えていかなければいけないと思います。

下側は小学校英語です。昨日英語のスピーチコンテストがありました。教育長の御挨拶にもあるんですが、英語は皆さんを多くの新しい冒険に導く重要な言葉です。そんなフレーズがございました。ここにありますように、英語の勉強は大切だと思いますか、そういったことを思っている子どもが大変多いと思います。

ただ、英語の勉強が好きという割合が少しずつ減っている。ここはまた一つ課題があります。

52分の18にまとめてあります。学ぶことの楽しさを引き出すために、繰り返になりますけども、単元の面白さ、ねらいを明確にする。そして、課題の出合わせ方を工夫するという。効果的な言語活動を選択して、言語活動を充実させるという、そういったポイントをまとめさせていただきました。

続いて19ページからは、学習の基盤となる力。小中ともに友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。これは非常にポイントが高く、中学校では、総合的な学習の時間で自分の課題を立て、情報を集め整理して発表するなど、学習活動に取り組んでいますかと。これもポイントは上回っていて大変うれしいです。いいところもたくさん出ています。

続いて、20ページです。20ページに言語能力の強みと弱みをまとめました。一番下にありますように、あらためてやっぱり読解力をはぐくむ20の観点を大事にしたいということです。学調で振るわなかった問題もこの具体と抽象。中学校ではその文章や図表等

を結びつけながら筆者の主張をより正確に理解するなどの観点を意識して指導していく。  
要するに系統的に指導していくということが大切だと思っています。

情報活用能力については、21ページから書いてございます。御覧ください。

22ページにまとめました。新教育プログラムの柱のところについても触れております。  
自分の考えをまとめて説明したりする力を高める資質・能力を高めていきます。

23ページからは問題発見・解決能力についてデータが書いてあります。

24ページにまとめがあります。

課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたとの肯定的な回答は全国順位も高いというのは非常にいいことだと思います。この四日市モデル、これまでやってきたことの成果かなということも思います。

続けて、キャリア教育、25ページからです。

ここにありますが、自分には、よいところがあると思いますか。将来の夢や目標を持っていますか。

次の27ページにあります、学校に行くのは楽しいと思います。これらというのは今見直ししている総合計画の進捗状況を測る指標にもなっています。さらにこの自己肯定感というのはもう御承知のとおり、三重県のビジョンの中での一丁目一番地ということで、自己肯定感を涵養する教育の推進というのを掲げています。そういったところでも大切なところかなということです。

52分の28に考察を載せました。

続いて、52分の29からは、生活習慣と学力の関係です。またデータですので御覧いただきたいと思います。

全国的にそうなのですが、やっぱり勉強時間が少ない。どうも減ってきているというのも一つ課題かなと分析しています。

いかに、与えられた宿題・勉強ではなくて自分でやっていく、勉強にしていこうかということがポイントになっているかなと思います。またこれは目を通してください。

52分の32からは学校質問紙の結果についてまとめたものです。

正直なところ、本当にそうなのかなというところなんですけど、例えば34ページの(3)総合的な学習です。伊藤委員からも指摘されていますけれども、課題の設定からまとめ、探求の過程を意識した指導ということは非常に高いんですが、子どもとのギャップもありますし、本当にどうなのか。総合的な学習の授業を見ていっても、これちゃんとで

きているのかなということもあると思います。またこ入れしていく必要があると思います。また（４）の小中との連携ということについても、本市91.9。全国に比べたら高い感じがしますが、当たり前のようにこれは学びの一体化でやっています。ではなぜ答えてないのかということところです。同様に、ICTの活用というのは、35ページの上から二つ目にありますが、教員がコンピュータなどのICT機器の使い方を学ぶために必要な研修機会がありますか。これも本市では100%のはずです。聞いてみると、やってはいるが、周りのところと比べたらまだまだという意識で、できていないと回答したという答えを聞いています。そういったところも幾つか見受けられますので、またその辺りについても今後なんとかしたいと思います。

37ページからは、今後の取組の重点をまとめました。これらはこれまでも学校に伝えてきたことです。1番の学調の活用。2番の言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の育成、こういったところをしっかりとやっていきたいと思いますというところなんです。

そして四日市モデルを大切にしたい授業改善を図りましょうというところが、もうこれはもう既に4月当初に各校にお知らせし、取組を進めてもらっているところです。そして4の非認知能力の育成というところをあげております。非認知能力は学びに向かう力、人間性、自己肯定感の育成には欠かせませんので、これまで取り組んできた問題解決的な授業づくりの延長として、自己選択学習を推進していこうと考えています。そのために、例えば行事と授業の二つの柱で、それぞれのモデル校をつくって取組を進めます。例えば授業では学びの一体化の授業の中で、早稲田大学の小林教授にも助言に入ってもらって、自己選択学習を主な取組として進める予定です。一方、行事のほうではキャリア教育の柱で、元岡山大学の中山芳一さんに引き続き助言いただき、非認知能力をさらに進めていきたいと思っています。

続いて、52分の40からは、各教科の授業づくりのポイントということで示してあるものです。問題からいろんな力、特に思考スキルというのを意識して、そのためにこういう流れで授業をするというようなことを分かりやすく示させていただきました。これを各校で活用するように図っております。これが52分の46の中学校数学まで続きます。

52分の47で参考資料としてまとめさせていただきました。

ざっとした説明ですが、以上で説明を終わります。

○廣瀬教育長 ありがとうございます。御質問等ございましたらお願いいたします。

堀委員、お願いします。

○堀委員 児童生徒質問紙の結果について、52分の14ページ辺りになると思うんですけど、これは令和3年度の結果もあるんでしょうか。

○草川指導課長 はい。あります。

○堀委員 令和3年度の小学校の結果が今の令和6年の中学校の結果になりますよね。ということは、令和3年がここに載っていると、この子たちが中学校で今こんな変化になったんだというのが見えるかなと思って。同じ子たちが3年経って、どのような意識の変化があったのかというところに、もしかしたら大きなヒントがあるのではないかなと思いました。

以上です。

○草川指導課長 ありがとうございます。おっしゃるとおりですね。私も令和3年度のデータを見比べていて、令和3年、その前の令和元年からちょっとずつ上がっているという傾向があって、今のようない見方はしていなかったんですが、一度あらためて見てみたいと思います。

○廣瀬教育長 52分の7ページの各教科別調査結果を見ていただくと、令和3年は、6年生のときは国語は100ポイント、全国と同等であったものが、中学校、今回の問題は難しかったとはいえ、100を下回っている。算数は逆に100を下回っている小学校6年生が中学校3年生で100を上回るという。この辺りですね。

○伊藤委員 そうですね。52分の6ページ、国語・算数を見てみると、今教育長が言われたように、令和3年度の子どもたちが中3になって、令和6年度はどうかという、そういう見方というのは、継続的に見ていくのは大事だなと思いました。

そうやって考えていったときに、ざっと見た中で、小学校の算数が、前は全国との差がそれほどなかったのが、ここ2年間で差が大きくなっていっているということはどう捉えていくかというのが、分析をした中でちょっと掘り下げて、こういう結果につながっている。中学校へいったら結構上がるんですね。これは以前からも中学校の研究協議会とか、教材も結構よく考えられていて、その成果が以前からそれは出ているんじゃないかということ言われていたと思うんです。小学校の場合はそういうのはないんだけど、ただやっぱり国語なんかでも、去年駄目なところ、今年はプラスになっていたりというのは、やはり先生たちも学校もその辺りを意識しながら指導もされている。そういう一つの成果が出ているのかなということ伺えるんだけど、算数については全体的にやはり伸びていかないというか、むしろ以前よりも伸びにくくなっているところが気になって

いる。この辺りは一体どういう理由からそうなるのかということを見ていかないと、算数も、5年生のときにちょっと頑張ったからとかいう問題ではなくて、低学年のうちから継続的にしていかないと、それだけの力は高まっていかないとと思うので、学校としての取組として、その辺りは見ていく必要があると思いました。国語でも以前よりも改善されていることは、それが出てきているけれども、やはりそれをさらに伸ばしていくためにどうしていくかを今後考えていかなきゃならないと思います。学力の関係で見ていくと、大卒で言うとその辺りが気になりました。結局、弱みとして出てくる部分が、少し問題が変わるので、ぴったり一緒ではないんだけど、よく似ているんですね。自分の考えが伝わるようにどう書き表し方を勘案していくかは、内容が違えどもほとんど同じところで、やはりそういう傾向が出てきているというところを考えても、やはり一つの、国語の場合ですね、算数も共通する部分もあるとは思いますが、分析的にこういったところを頑張っていこうというところを、提示していく必要もあるのかなと思いました。

52分の18ページの、学ぶことの楽しさを引き出すためにという、この枠囲みのところは非常に大事だなと思っています。やはり授業が楽しみであったり、意欲的に取り組むと言えることは、学力向上については非常に大事なところだと思うので。ここはまた本当に、各学校にこの分析を提示されると思うんですけども、共通理解して進めていただきたいなと思いました。特に、先ほども課長から説明ありました小学校の英語が、マイナスポイントが結構高い。小学校からこのマイナスで、必ずしも算数・数学を見れば、中学校にいったんどんどん難しく感じて取り組みにくくなるというわけではないなという気はします。中学校の子が結構授業に対してプラス評価というか、感覚を持っているという。むしろ小学校よりもその辺りがあるって、これは一体何なんだろうなというのは、疑問に思う部分もあるんですけど。英語についても、やはり小学校で英語に対しての意欲や動機づけを大事にして育てていこうということを特に意識されているんだと思うんですけども、ぜひその辺りも。このマイナスになっていくところの原因を少し注視していく必要があるのではないかなと思いました。

あとタブレットの使用が少し気になります。ちょっと伸び悩むというか、伸びていっていないなと思います。一旦導入したときのざっとした、今後これが入っていったという意識から、慣れたみたいなものがあるのかもしれませんが、先生たちは使ってどうこうと言っているけれど、子どもたちはそれほど使用しているということについてあまり高い評価、%になってない、その辺りどのようにつかんでいって今後に向けていくかが必要な



と思います。

課長の話がありましたけど、どこというわけではなく、問題解決能力向上のための取組、これは教育支援課もそういった冊子を出して、それについて学習を進めていくと。指導課、教育支援課あげてされているので、その成果はやはり出てきているなどということは、授業の様子からしても効果が出ているなどというふうに思いました。

もう一つ、家庭学習のことで、先日、県の教育長会に出させてもらったときに、県は家庭学習の1時間という一つの線をして、それ以下の子どもが全国に比べてかなり多い。休日については相当多いということで、大きな課題であるという捉え方をしていました。四日市は、分析の仕方が関連の中でのグラフなので、はっきり分からないんですが、聞かせてもらったら、やっぱり四日市も若干低いところもあると。ただ県全体よりはそこまではないような感じであると捉えているんですけども、四日市としてもやはり家庭学習についてどうしていくかと、この後のまとめのところ、今後の取組というところにも家庭学習のことは取り上げられているんですけども、その辺り、今後どういうポイントで進めていく必要があると考えているのかと。ただ、学校のほうにどうその辺りを提起していくのかということだけは少し検討する必要であるのではないかなと思いました。

取りあえずは以上です。

○**廣瀬教育長** たくさんありましたが、52分の7ページの小学校算数の低迷については、どんなふうに捉えられているかについてお願いします。

○**草川指導課長** その単元、算数の面白さ、その少し前には、この面白さというのは何なのか、単元でつきたい力は何なのかということ意識し、みんなが取り組んでいたと思います。それが少しずつ、慣れと言いますか、何年か経って、まだまだそれがはっきりしていってないのかなと思います。つまり面白さ、ねらいがちゃんと明確になっていない授業がまだ見受けられるというのが実際にありますので、これについては、あらためて意識させたい、やっていく必要があるというふうに指導主事と話をしているところです。

○**廣瀬教育長** 52分の17ページの小学校英語の授業が好きというところの課題については、動機づけの問題か、何か要因として今考えているところはどうか。

○**草川指導課長** これもそういう実態があるということで、実際にそれがなぜなのかというところは分析し切れておりません。英語教科になって英語専科という枠組みで今授業が多くされています。そこで今言っていたような、英語の本来の楽しさというのがまだまだできていないのかもしれない。昔ですとHEF、小学校英語指導員と連携しながら、H

E Fが入っている授業は評価が高いんです。楽しいとか面白いとか。英語専科だけやっていると楽しくないという、そんなことも聞いたことがありますので、その辺りの力量、指導力というのは、もっともっと研修で進めていかないといけないと思いますし、今言ったような、何を大事にしたいのか、ねらいは何かということをもっともっと明確にする授業づくりを進めていかなければいけないと思っています。

○**廣瀬教育長** 私が少し感じるのは、例えば算数でも、先ほど伊藤委員が言われたように、出題内容は違うけど、課題は同じところにあったり、割合であったり小数の計算処理であったり、ずっと同じ課題を引きずるんですよね。それが中学校までずっと影響したりする。それがさっきの英語の問題もそうです。理科も好きというのが低い。ここには、もしかすると小学校の先生の専門性のところに課題があるのかなと。なかなか解決は難しいですけど、本当の肝を理解して指導ができていいのかという。全部の教科をやっていく中で難しい課題ではあるんですけど、その辺が問われているのかなと。小学校は英語専科を置いています、英語の免許を持っている人を全部置いているわけではなく、学校の中で役割分担しているというところで、研修してもらって専門性を高めてもらうという、その取組の途中ですが、こういったところは少し影響するところはあるのかなと。そういうところで、今後小学校の教科担任制を国も進めていこうとしている中で、この辺りのシステムのつくり込みというの、もう少し考えないと根本的な解決にはならないのだろうなと思っています。

○**伊藤委員** かなり本質に関わる場所ですね。

○**廣瀬教育長** 52分の21ページのICT機器の活用については教育支援課は何か手応えはありますか。

○**坂下教育支援課長** 総合的な学習の時間、さらに5年生までに受けた授業で、というところですね。

○**伊藤委員** 使っている割合は、全国に比べて11.5ポイント高い。52分の22ページに、情報活用能力としては挙げられています、四日市だけで見ていったときに、タブレットの使用についての質問紙の部分がそれほど進んでないような印象です。52分の21ページですね。例えば小学校では年を追って、ちょっとずつ一番高い評価のパーセントが落ちていっていると。その辺りはさらに上がっていくべきものであろうという思いがあるんですけど。中学校は結構増えているんですね。1年だけですが、小学校のほうがタブレットが入ったのが早かったですよね。

○坂下教育支援課長 そうですね。これについては、特にこの52分の21ページの中で注目しますのは真ん中ですね。総合的な学習の時間での使用については、全国で36.5%、小学校36.5%がかなり活用していますというようなところなんですけど、これが本市で見ますと、そこまでいってない。30%でも満たない部分になっていますけども、やはりこの辺、総合的な学習の時間などでしっかりと総合的にいろんなICTの機器が活用できているかどうかという、授業中はそうではないんだろうなと。ところが先日、文化会館で行われました科学展なんかを見ていますと、本当に子どもたちはタブレットも使いながら、自分で二次元コードをつけてそこに動画を入れたりとか、あるいはリンクを貼ったりとか、そういう様々な使い方ができていますので、そういう意味では、もっと授業中いろんな活用は工夫できるのではないかなと思っていますね。もっとしつこいぐらいに使って、一つの成果をつくり上げるというようなところは、ひよっとすると進んでないのかなというのは思っているところです。子どもたちのポテンシャルは科学展なんか見てもかなり感じますし、驚くほどのスキルやアプローチができていますので、その辺の可能性には賭けてみたいと思っています。

○伊藤委員 ということは、総合的な学習の時間と、5年生までに受けた授業で、というこの内容は、ただ単に回数だけで見るよりは、子どもたちの使用の様子を見ると、やはり進んでいると考えていいのでしょうか。

○坂下教育支援課長 中学校に関しては、全国との比較でいいですと、平均以上のところ。小学校は、そんなに変わらない。全国と比較して憂慮すべき数字ではないのかなとは思いますが、やはりその質ですよ。先ほどの学調での話にもありましたけども、家から学校までの道のりを算出する、その問題でも、300と900、それが片方は1200と。距離は同じなんですよね。そこでいきなりタブレットを持たせて、話してみても、子どもたちは分からない子には分からない。やっぱり300、900と1,200で同じ距離に見えるけども、実はそこに出题者の意図があって、意味合いがあるわけですね。その意味合い、観点というか目の付け所をしっかりと授業者が子どもたちと共有しながら、そういう作業を進めていかないと、今後、例えば自由進度学習等が入ってきても、この話は時間を費やすけれども、その本当の目の付け所、何で300、900と1,200という同じ数字がわざわざ与えられているのか、ということをしっかり考えながらいかないと思考が深まらない。そういう意味では、ますます授業者の目の付け所の与え方というか、観点の引き出し方というか、そういうのがICTも問われるのかなと思います。それは今

後どういふうに四日市が進めていくかが非常に大きいのかなと考えます。

○廣瀬教育長 ありがとうございます。

家庭学習の在り方についてはいかがでしょうか。指導課長、お願いします。

○草川指導課長 実際、家庭学習の時間としてはやはり短い傾向があります。ただ、時間の長さというよりも、やはり家庭学習の質をしっかりと高めていきたいということで、本当に自分で選択していける自主研究、自由研究的な課題にチェンジしながら、それを子どもたちが本当に自分たちで課題をつくって、取り組んでやっていくという家庭学習、それをどんどん進めていきたいと思います。その方法や具体例などは示しながら、家庭学習の啓発に努めていきたいと思います。

○廣瀬教育長 ほかいかがでしょうか。

○伊藤委員 後ろのほうに読解力と論理的思考の思考力の向上についてまとめていただいて、現場にとってはこれは大変参考になるだろうなと思って見せていただきました。

論理的思考力は新教育プログラムの中にも出てくるので、これは教科の中という形になりますし、それをプログラミングの中でつけていく部分も随分大きいと思うので、それはまた加えてだと自分としては理解させてもらいます。

それと今後の方向性、52分の39に、読解力と論理的思考力というのは、以前上げなかったようなところを今回はこうやって上げていただいたということで、後ろの内容だと思うんです。その辺はよく分かるんですけども、非認知能力の育成については、これは後で出てくる新教育プログラム、総合計画の中でも関わってくることでですけども、日々の学習、学校の活動の中で非認知能力を高めていく、いろんな教科や活動で高めていくというのは、それはよく理屈としては分かるんですけども、具体的にどうしていくことが非認知能力を高めることになるのか。非認知能力を意識することは、教育活動として何が変わるのかというところを、やはりある程度鮮明にしていかないと、言われる理屈は分かりますが、一体じゃあ授業で何を変えていく、何をどう進めていくのか。学校のいろんな、例えば行事も含めて、何をどうしていくことで、この非認知能力を、土台にするというのだったら、土台にする土台をしっかりとしていかなきゃならない。そのための活動、相まってこれは当然高まるものなんですけれども、そこは意識してメッセージを出さないと、現場は、さっと読んで終わっていくのではないかという気がして、具体的に何をしていくかというところはどうつなげていくかが非常に大事ではないのかなと思いました。

○草川指導課長 どうする、どうしていくか。まず、この2年ほど非認知能力ということ

についての理解が大分深まってまいりました。そこで授業の中でどうしていくかで、具体的にどうなったらどんな非認知能力が高まっていくかというところについて、まずモデル校に指導主事が教授と一緒に入り、こういう授業をすると非認知能力が高まる。あるいはこんな具体的な方策をして高めていくというような具体例を明確にする。それをみんなに見てもらおう。まずそのイメージとなる授業をつくって、それは学びの一体化の推進事業の中で、学校でキャリアの推進部門を設けて、それに入っているいろんな柱を進めていく。来年度それをしっかりやって、みんなでイメージをつくる予定です。

○伊藤委員 ぜひ進めていただきたいなと思います。非認知能力はこれから新たなことをいろいろやるという感覚だけではなくて、今までやってきた学習活動の中に、実は高められることもいっぱいあるんだと。これはもう言葉は違いますが学習指導要領の中にも触れていると思います。そういう中で体験的なことや、自尊感情を高める、いわゆる自信を持ってというか、自分が選んで目標を持って何かをやっていくだとか、そういうような活動等も全部それにつながっているんだということ。だから、全く新たなことをやる感覚ではなくて、実はそういうことを意識してやってきたことを、もう一回確かめながら進めたい。さらにこうやっていくことで高めていきたいんだということなんだろうなと自分は思っていますので、ぜひまたよろしくお願ひしたいと思います。

○廣瀬教育長 ほかいかがでしょうか。よろしいですか。

豊田委員。

○豊田委員 5 2分の9のところですが、中学校の数学が非常に伸びているというご報告で、確かにそうなんです、ばらつきが大きい。大きいと見るかどうかは微妙なんです、中央値が9.0で、標準偏差4.3で、全国だともうちょっと標準値が小さくてというあたりがあると、平均値はマジック的なところがあるので、そこでは高いと出ていても、ばらつきがあるということは、ついていけない子どもたちがいる可能性があるというのがグラフの分布になるのかなと思っていたので、その辺りがもうちょっと縮まってくるのかなというのを見ていました。

○廣瀬教育長 去年、英語の学調があって、英語はもっと課題の大きいグラフだったんです。要は5問とか6問のあたりに一個山が出てくるみたい。やっぱりずっと経年で積み残されてきた学力課題というものが中3になると大きくなっているのかなということがよく分かるというか。小学校の正答数の分布グラフと中学校比べていただくと、国語でもやっぱりなだらかな山になっていて、左寄りが多くなっているというのは、学習内容が難し

くなるにつれて、学力差が顕著になってくるという、その裏返しなのかなと思っています。その辺りの課題認識をしっかりと持っていきたい。

○豊田委員 やっぱり、ちょっと全国とか県より低いというところが力が入っていったとしても、グラフの形としては比較的いい感じのグラフの形にできているけど、数学はいいと言いながらも、多分一部の上位が引き上げるだけで、全体が上がっているという感覚には、小学校から比べるとならないので。そこがひょっとしたら落とし穴になっていくんじゃないかなという気がしています。

それと、情報ICTの活用のお話が出ていましたが、総合的な学習の時間と、ICTを週に何回使っていますかというのの関係が分からなくて。そここのところの総合的な学習の時間で課題を立てて情報を集め、整理して発表っていうところは、今のお話を聞いている中では、そこにICT、タブレットが使われる云々というように会話が進んでいたような理解をしたんですけど。この文言だけで情報を集めて整理して発表というのとは、ICT機器のことを強く言っている話なのかという疑問があつて。

○伊藤委員 こっちのことです。私が言っているのは。

○豊田委員 そうですね。こっちのことも少しお話が出ていましたよね。このほうから。そのときにそういうニュアンスがあったときに、ほかのいろいろな方法、この総合的な学習の時間だと、いろいろな方法での情報集め、整理と取るのであれば、ICTだけタブレットだけではなくて、子どもたちがどれほど意識して取り組むかどうかななるのかなと思いました。伊藤委員が言われた、ICT機器をどれだけ使っていますかという御質問というか、御意見に対しての御回答の中に、この上の総合的な学習の時間ではというところがICTのことに偏ったような説明になっていたように思ったので、どうなのかなというのを感じました。

○草川指導課長 豊田委員がおっしゃるように、ここはあくまでも情報活用能力ですので、いろいろICTの活用に限らず、それこそ情報を人に聞いたり、自分で調べるところですので、別ではなく一部にはICTのことは絡んでくるんでしょうけど、あくまでも情報活用能力といったところの内容になっています。

○豊田委員 そうすると、子どもたちがそういうことをやっているという実感というか、体感というか、子どもたちが答えるときに、そういうふうに調べてこれだけ分かったんだということが、彼女ら彼らが、調べるということはたくさんの方があって、いろいろなことなんだということが実感できると伸びるのかなと思いました。やっていることがそれ

なんだよと伝えることで、この回答が変わるのかなと思ったので。

○廣瀬教育長　そうですね。設問に要素がたくさんあって、課題を立てて、情報を集め整理して、調べたことを発表して、という三つの要素があるんですよね。賢い子だったらいろいろ考えるかなと思う。複数の問いが並べられている設問は非常にハードルが高いなというところがあって、どれだけ実態を反映するのが難しいですけど、この三つのキーワードを授業者が、さっき坂下課長が申し上げたとおり、授業者が観点としてねらいとして設定して、学習活動として展開するかということが子どもの結果から問われるという。三つ満たしてないですよと言っているようなものかなというのがあるので、非常に難しいのかなと思いますが。ここの辺りが探求的な学習をどうプロデュースするかというところが問われているのかなと思います。

○豊田委員　基本的にはでもこれね、普通アンケートって一個に一個の質問で答えやすいようにしないと後の活用が難しいですけど、そこができてないと思います。

○廣瀬教育長　時々そういう設問があるんです。

ほかいかがでしょうか。数馬委員、よろしいですか。

○数馬委員　これ全国でみんながやっているわけですよね。だから同じ設問で。今のような、こういう設問はおかしいんじゃないかということは言えるんですか。

○廣瀬教育長　言えるのかな。あんまり言ったことはないね。これにこだわらず、自分のところで評価のアンケートを採るということはできるので、正確な情報をつかもうと思ったら、アンケート項目を変えて取るという方法あるので、そこはまた検討していきたいと思います。

○数馬委員　子どもがする前に先生が自分でどう答えるかをやってみたほうがいいんじゃないかなというぐらい、ちょっと答えるのが難しいような設問が幾つかありますね。

○廣瀬教育長　そうですね。一方、後半は学校質問紙といって、学校がどれかを選択する、学校として選択するので、個々の授業者の実績は反映されないというか、相対として見て答えるので、なかなか正確な数字が反映されているかというのは難しい。あくまでも傾向でしかないかなと思います。

よろしいですか。

ありがとうございます。それでは、この項は終わりたいと思います。またいろいろお気付きの点あったらお知らせください。

どうしましょう。1時間ぐらいたったので、少しあの時計で40分まで休憩させていた

だいて、教育委員会の点検及び評価からまた再開をしたいと思います。お願いします。

午前10時30分 休憩

午前10時40分 再開

### 令和6年度の教育委員会における点検及び評価について

○廣瀬教育長 それでは、再開いたします。

続きまして、報告事項「令和6年度の教育委員会における点検及び評価について」の説明を教育総務課長、お願いいたします。

○森教育総務課長 教育総務課長森でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

資料は52分の49ページからを御覧ください。

こちらにつきましては、先の10月16日の定例会で御協議いただきありがとうございました。そのときの内容を踏まえまして、私どものほうでこちらのほうに実施計画の案として定めたものでございますので、よろしくお願いいたします。

まず一つ目、目的ないしは二つ目、評価委員につきましては、先の定例会で示させていただいているとおりでございます。委員の委嘱につきましては、令和5年度に引き続きまして、三重大学教育学部教授、織田泰幸様、四日市大学総合政策学部教授、高田晴美様御兩人にお願いいたします。

それでは、次の52分の50ページを御覧ください。

実施計画につきましても変更はなく、点検評価の総括として、教育懇談会兼施策評価委員会を7月頃に一回実施といたしたいと考えております。

続きまして、本年度の評価項目についてでございます。前回の定例会におきまして、重点評価項目について四つの案を候補とさせていただき、皆様に御協議をいただいたところでございます。そこでいただきました御意見などを踏まえ、私ども事務局で検討を進め、令和6年度の重点項目につきましては、ビジョンの中の基本目標の2、心と体の健全な育成の中で読書活動の充実。もう一つは、基本目標1、確かな学力の充実のICTの活用による情報活用能力の育成とさせていただきたいと考えております。

まず一つ目の重点とさせていただきました読書活動の充実についてでございますが、こちらは先の協議の際、数馬委員のほうから、読書活動におけます子どもたちを取り巻く環境から、日常生活の中では、映像や画像などに頼り過ぎているところがあるのではないかと



と。そのため、書物に親しむことで言葉に触れ、人間性が育まれるということから、電子図書にしても、紙の図書にしても、読書に親しむことが必要であるとのことから、あらためて読書環境の点検が必要との御意見をいただいたところでございます。また、豊田委員のほうからは、読書活動について、本を読まない児童生徒が増えているという調査結果が出ており、どういう理由により読書をしないのか検討し、小さい頃から図書に触れる機会を確保することの重要性から、施策の点検評価が必要であるとの御意見をいただきました。

もう一つの重点とさせていただきましたICTの活用による情報活用能力の育成についてですが、こちらは伊藤委員のほうから、ICTの活用について、情報活用能力をいかに育てるのか。問題を発見したり追及したり、自分の考えを発信したりという情報活用能力が様々な学習の土台となっていることから、第4次学校教育ビジョンにおいて着実に進めていく必要があり、点検が必要であるとの御意見をいただきました。また、堀委員のほうからは、ICTの活用について、活用が進んでいる学校とともに、まだ進んでおらず、これから進めようとする学校についても現状を点検し、これからの進め方について評価してもらう必要があるとの御意見をいただきました。加えまして、先ほどの学調の結果報告についても、皆様のほうから種々御意見をいただいたところでございます。なお、評価の参考としていただくものについては、こちらに示してあるような視察案でございますが、こういった内容の視察を行い、評価の参考にさせていただいてはどうかと考えてございます。また、継続評価の項目として、新教育プログラム、四日市市GIGAスクール構想、働き方改革につきましても、第4次四日市市学校教育ビジョンの中間まとめとして、これまでの取組状況を総整理し、今後の施策展開に生かしていきたいと考えております。

最後に52分の52ページを御覧ください。

こちらは本市の教育施策及び学校の評価システムということで、資料のような形で実施要項を定めてございますが、御参考までに掲載させていただきました。よろしければ御参照ください。

以上、令和6年度教育委員会の点検評価に係る報告となります。御協議のほど、よろしくお願いいたします。

**○廣瀬教育長** 令和6年度の教育委員会における点検評価の施策の評価、重点項目についての提案がありましたが、今の説明に対していかがでしょうか。

よろしいですか。

それでは、この内容については前回いろいろ御議論いただきましたので、先ほどまとめ

ていただいたとおり、委員からの様々な御意見も反映する中で、読書活動の充実、これは電子図書館も運用されて2年目に入ったところから、運用と学校教育活動の関連であるとか、読書の重要性、それから今後の活字離れを抑える、抑えるというか、言葉に触れ、人間性を育むための読書活動をどう展開するかと。ICTの活用による情報活用能力の育成については様々な学習の土台となる、そういったところ。それから、学校間格差もあるのは否めないなので、その辺りどうやって全市的に底上げを図って、子どもたちが本当に文房具として適切に活用できるか、こういったところを見ていきたいと思いますので、よろしくお願いたします。

#### 四日市市総合計画中間見直しについて

○廣瀬教育長 それでは、先にお諮りしました非公開の案件に入ります。傍聴の方はお見えになりませんね。